



TITLE:

[書評] Bert Bultinck, Numerous Meanings: the meaning of English cardinals and the legacy of Paul Grice, Elsevier, 2005

AUTHOR(S):

三木, 那由他

---

CITATION:

三木, 那由他. [書評] Bert Bultinck, Numerous Meanings: the meaning of English cardinals and the legacy of Paul Grice, Elsevier, 2005. 京都大学文学部哲学研究室紀要 2009, 11

ISSUE DATE:

2009-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/71123>

RIGHT:

## 書評

Bert Bultinck,  
*Numerous Meanings:  
the meaning of English cardinals and the legacy of Paul Grice,*  
Elsevier, 2005

三木那由他

### 1. コーパスという武器を手

本書で行われていることを短くまとめるなら、コーパス分析という手法を英語の数詞に応用してみるということになるだろう。言語学ではよく聞かれる「コーパス (corpus)」という言葉だが、哲学の人間にとってはあまり馴染みがないかもしれない。コーパスというのは、要するに電子化された膨大なテキストデータの集積だ。特定の言語に限定されたコーパスもあれば、多言語をまたがったコーパスもあるが、いずれの場合もたいていはネット上で容易に利用することができる。このことを踏まえて本書の目標を言い換えるなら、膨大なテキストデータをもとに英語の数詞についての観察、分析を試みるということになるだろう。

英語の数詞というと、さまざまな言語の中の一つにすぎない英語の、しかも数詞という極めて限られた範囲の現象だ。では、このような狭い分野の研究に哲学者が注目する理由があるのだろうか？　ところがこれが大ありなのだ。このことを理解するには、いわゆる「語用論の割り込み (pragmatic intrusion)」問題を抑えておく必要がある。

現代語用論の出発点に位置する Grice は、発話の意味論的内容をその真理条件的内容と同一視していた(Grice, 1975)<sup>(1)</sup>。そして同じ Grice(1975)では、発話の内容が算出するプロセスにおいて、意味論的な処理は語用論的な処理に常に先立つとされていた。ところがその後の研究で、語用論的プロセスの発動を前提としなければ真理条件を確定できない発話の存在が知られるようになった(cf. Chapman, 2005, chap. 9)。真理条件の確定に語用論的プロセスが紛れ込むというこのような事態、これが「語用論の割り込み」と呼ばれる現象だ。そしてこうした現象の具体例であり、しかもその中で特に際立ったものとされるのが、英語数詞の振る舞いなのだ。それゆえ英語数詞の分析にコーパスを用いるという試みは、単に狭い分野でテキストデータの分析を行なうということにとどまらない。問題となっているのはむしろ、意味論と語用論の関係というかなり広く、また重要な事柄であり、数詞は

まさにそれが問題になる典型的な例となっているのだ。

この意味論と語用論の関係という問題については、ある説の理論的な整合性や、ある説に対する反例の（理論家による）構成可能性という観点からしばしば論じられる。いや、もっぱらそうしたことがばかりが話題になっているといってもよい。その限りで、この問題に関する論争は経験的データから切り離された、抽象的な議論と見なされるべきものがほとんどだ。

こうした背景からすると、本書で Bultinck が試みていることは（いくらかジョークを交えつつ）次のように表現されよう。Bultinck はこのような抽象的な論争の場に、コーパスというこの上なく経験的で具体的なデータを武器に、「殴りこみ」を仕掛けようとしているのだ。そしてこれから見ていくように、その一撃はときに極めて強力だ。

さて、ここからこの殴りこみの実際を見ていこう。まず Grice の流れを受けた論者による数詞の扱いを、Bultinck による要約に沿って概観する。そしてそれに対する Bultinck の批判と、代替案の提示を紹介する。最後に Bultinck の議論が導く帰結について考える。

## 2. 数詞の意味をめぐる

Bultinck は第二章と第三章を割いて、Grice の「含み (implicature)」の理論と、さらに Grice の影響下で活動するさまざまな論者（いわゆる Gricean、および neo-Gricean）による数詞の扱いとをそれぞれ概観している。とはいえ、そこで取り上げられている多様な説をすべてここで紹介することはできない。Bultinck が最終的に主な仮想敵と見なしている立場について言及するにとどめよう。

伝統的な Gricean の多くは、数詞に関して「少なくとも」意味論（‘at least’ semantics）と呼ばれる説を取っている。そう Bultinck は指摘する。そして Bultinck によると、neo-Gricean と呼ばれる人々も、いくつかの修正を試みつつも基本的には同じライン上にいる。「少なくとも」意味論とは、数詞  $n$  の持つ内容を少なくとも  $n^{(2)}$  として捉える立場だ。

具体例を挙げてみてみよう。

- (1) 太郎には 3 人の子供がいる。

真理条件的な観点からは、この文の発話の内容は太郎にはちょうど 3 人の子供がいるということになるだろう。そしてこれはわれわれの直感にも合致する。しかし、たとえば太郎に 4 人の子供がいる場合、この発話は偽となるだろうか？ ならない、というのが (neo-)Gricean たちの考えだ。実際、「太郎には 3 人の子供がいる。ただ私が見ていないだけ

で、もしかしたらもつというかもしれない」という発話は何ら不自然なものではないはずだ。このことから、**3人以上の子供はいない**という内容は語用論的に生じているにすぎないと考えられ、意味論的には**少なくとも3人の子供がいる**ということがこの発話の内容とされる。これが「少なくとも」意味論だ。

まずこれが第一節で述べたように、意味論と語用論の関係という大きな問題に絡んだ事柄であることを確認しておこう。すでに見たことだが、(1)には二通りの真理条件が考えられる。一方は**太郎にはちょうど3人の子供がいる**ということであり、他方は**太郎には3人以上の子供がいる**ということだ。ここで、通常の形式意味論では前者のみがもっぱら(1)の真理条件として扱われることに注目してほしい。そしてこれは、後者の内容から**3人以上の子供はいない**という内容が語用論的に生じることで得られるものとされている。ここでは(形式意味論で扱う限りの)真理条件的内容の確定に、語用論的な処理が入り込んでいる。まさに語用論の割り込みの典型例だ。

それにしても、(1)がある場合に**太郎には3人以上の子供がいる**ということの内容とするというのは納得がいくとしても、そこから「3」は**少なくとも3(3以上)**を内容とする結論付けるのは、かなり奇妙なことではないだろうか。もちろん、(neo-)Gricean たちもその点を意識している。それゆえ、いくつかの論証を用いてこの説を補強している。

Bulfinch がまとめによると、この説のサポートに用いられる議論は多岐にわたる。ここではそのうちの二種類を(1)に即してまとめてみよう。第一に上で見たように、(1)における**多くて3人**という内容は取り消すことができる(cancelability)<sup>(3)</sup>。これは、その内容が含みであるということの証拠となる。そしてさらに、「太郎には、4人でないとすれば3人の子供がいる」という発言が不自然でないということが挙げられる。これは「保留(suspension)」と呼ばれる。Bulfinch のサーベイによると、保留が可能な内容は含みとして扱うというのは、多くの(neo-)Gricean の一致した見解だ。またもう一つの根拠として、実際に**ちょうど3人の子供がいる**という内容が**3人以上の子供がいる**という内容から語用論的に生じる過程が、Grice の理論に従って説明しうるということも付け加えることができる<sup>(4)</sup>。

これに対し、Bulfinch はどのような批判を展開しているのか。具体例として取り上げられるのは、数詞 *two* だ。そして、この *two* の BNC<sup>(5)</sup>に収録された用例が収集される(その数は1000例に及ぶ)。

まず指摘されるのは、(neo-)Gricean がカバーしている範囲が、実はさほど網羅的でないことだ。上の例でも明らかだが、(neo-)Gricean が扱っている事例で数詞が表わしているのは、被修飾名詞句が示す集合の基数(要素の数。つまり(1)では太郎の子供の集合に含ま

れるものの数)だ。だがこうした用法は、収集結果を見ると、全体の 74.1% (741 例) にすぎない(p. 118, Table 6)。残りの用法(時間を示す、数式中で用いるなど)については、(neo-)Gricean の説はその理解にまったく役立たない。とはいえ、これは何ら決定的な反論ではない。そもそも彼らは自分たちの説が数詞のあらゆる領域での意味を説明し尽くすとは、必ずしも主張しないだろうからだ。

そこで、Bultinck はさらに徹底した批判に向かう。(neo-)Gricean の説明によれば、数詞 *n* は基本的にちょうど *n* (少なくとも *n*+多くて *n*) と解釈されるが、そこに含まれる多くて *n* という内容は語用論的に成立しているとされていた。そしてこのことは取り消し可能性と保留をめぐる議論で正当化されていた。そこで Bultinck が目指すのは、ちょうど *n* という内容が数詞の意味としては一般性を欠くということ、また数詞の意味論的内容とされる少なくとも *n* も一般的ではないということ、さらに正当化に用いられる基準(取り消し可能性、保留)が妥当性を欠くということ、このそれぞれをコーパスを用いて論証するということだ。

まず、Bultinck は *two* の用例のうちで基数を表わさないものを考察から排除する。ただし先述の 741 例に加え、この用例の延長線上で理解しうる代名詞的用法(116 例)も、排除されずに残されている(つまり合わせて 857 例が考察対象となる)。

Bultinck によれば、その中でちょうど 2 を内容とする用例は 42.6% にすぎない。しかもそれらは基本的に、*exactly* や *only* と組み合わせさっている、定冠詞と組み合わせさっている、形容詞句と組み合わせさっているなど、限られた統語論的な環境のもとでもっぱら現れている。それゆえちょうど 2 は *two* が一般的に持つ内容とするには、出現条件が限定されすぎている。このように Bultinck は主張する。

数詞 *n* の標準的な解釈をちょうど *n* とするのはうまくいかない。では、数詞 *n* の意味論的な内容は少なくとも *n* であり、ちょうど *n* は語用論的处理によってそれから構成されたものだ、という(neo-)Gricean の主張についてはどうだろうか。

まず Bultinck は少なくとも 2 の用例の少なさ(全体の 3.9%)を指摘する。それゆえ、*two* が少なくとも 2 という内容を実際にとることはほとんどない。だがむしろこの指摘は、これだけでは(neo-)Gricean に対する的確な批判にはならない。(neo-)Gricean のもっとも中心的な主張は、ちょうど 2 が少なくとも 2 に還元されるということだからだ。そこで Bultinck は、(neo-)Gricean の主張する取り消し可能性と保留の一般性をコーパス分析によって検討する。そしてここにおいて、コーパスという道具の威力が最大限に発揮される。まず保留について Bultinck の調査結果は何を告げるのか。それによると、保留の語句が文を不自然にせずに追加できる例は、驚くべきことに全体のわずか 4% に過ぎない。残りの 96% では、

保留語句の追加は不適格な文を生じさせる。取り消し可能性についてはどうか。こちらはさらに悪い。なんと全体の 97.1% の事例で、語用論的とされる内容の（つまり**多くて 2**の）取り消しが不可能だと確認されるというのだ。Grice や彼の後継者たちも認めているように、これらのテストは絶対的なものではなく、あくまで語用論のプロセスが働いている可能性が高いと示すだけのものにすぎない。だがそれにしてもこのパーセンテージを見ると、そもそもこれらのテストが語用論のプロセスを確認する参考になるということも、少なくとも数詞に関してはかなり疑わしいように思える。コーパスが示す圧倒的な量の経験的データの力が、ここではいかに発揮されている。

こうして、Bultinck は(neo-)Gricean たちの説の失敗を宣告する。そして(neo-)Gricean の多くが奉じた「少なくとも」意味論に代わって、「絶対値」説を提示する。数詞 *n* の「絶対値」とは、**多くて *n* も少なくとも *n* も**内容としない、**端的に *n*<sup>(6)</sup>**ということだ。*two* のコーパス分析によると、「絶対値」用法の出現頻度は全体の 45.5% であり、この数字自体は**ぴったり 2**の出現頻度と大差ない。だがこの両者は、現れる言語環境に関して大きく異なっている。先にも述べたように、Bultinck の観察によると、**ぴったり 2**は限られた環境においてしか現れなかった。だが**端的に 2**はそうした言語環境の限定を持たず、かなり広い文脈で見出される。しかも、ここで細かく紹介することはしないが、Bultinck によると、**端的に 2**から**ぴったり 2**が派生するプロセスを、他の言語要素からの影響にもとづいて適切に記述することができる。それゆえ、数詞の意味論的内容（Bultinck は「規約的意味 (conventional meaning)」という表現を好む）は「絶対値」という概念によって理解すべきである。これが、Bultinck が提示する見解だ。

ところで、「ぴったり」説と Bultinck の主張する「絶対値」説との違いは、多くの人にとってあまりわかりやすいものではないだろう。Bultinck によれば、両者の違いはモダリティの有無にある。**ぴったり 2**において、こうした *two* を含む発話をする話者は、その *two* が**少なくとも 2**や**多くて 2**を排除するということにコミットしている。それゆえ、この場合の *two* はモダリティを含んでいる。だが「絶対値」としての *two* は、**端的に 2**であって、それ以外の可能性の有無についての話者のコミットメントを含んではいない。こうして見るなら、Bultinck の主張は、*two* のもっとも基本的な意味としてモダリティを含まない内容を採用するものだと思えることもできる。そしてそれに他の言語要因からの影響が加わることでモダリティが生じ、**ぴったり 2**という解釈を受けるようになるのだ。

Bultinck がたどった道筋を簡潔にまとめておこう。まずなされたのは、英語数詞の典型である *two* の用例を BNC から収集することだった。こうして得られた 1000 例のデータをもとに、*two* が取りうる諸々の内容が生じる頻度が算出された。その結果、**端的に 2**と**ぴ**

ったり 2 という二種類の解釈が全体の大部分を占めることが明らかになった。この時点でそれ以外の解釈（少なくとも 2 と多くて 2）が *two* の主要な解釈となる可能性は閉ざされる。そのうえで、ぴったり 2 が現れる言語環境がかなり限られたものであることが、これもまた用例分析によって指摘された。さらにぴったり 2 を少なくとも 2 に還元する二種類のテストの妥当性が検討され、その一般性の欠如が明らかにされた。こうした仕方（neo-）Gricean の説を退けたうえで、Bultinck はもっとも頻度が高く、しかも他の解釈の派生を説明しうる解釈として、「絶対値」用法を提示している。

総じて、コーパス分析を用いた批判や、自説の提示はかなり強い説得力を持つと思われる。コーパスが与える圧倒的な経験的データを無視したなら、そうして構築された理論は机上の空論と呼ばれても仕方ない。だが Bultinck の分析に従うなら、この圧倒的な経験的データの塊は、全体として Grice の影響下でこれまで行われてきた数詞分析の失敗を告げているのだ。

### 3. Grice からの乖離

それでは、圧倒的な経験的データを背景にした Bultinck の主張にはまったく問題がないのだろうか？ もちろんそんなことはない。Bultinck の主張の問題は、とりわけ彼が自身の方法論をより一般的な理論の中に位置づけようとするときに明らかになる。そしてこの問題が生じるそのとき、Bultinck の意に反して、彼の立場は Grice の立場から根本的に離れていくことになる。

Bultinck はコーパス分析が、言語要素の規約的意味（意味論的内容）を決定する有効な方法論になると主張する。そして第二節で述べた（neo-）Gricean の数詞分析の失敗や、より広く語用論の割り込みに関連するさまざまな議論の紛糾の原因は、Grice 自身が言語要素の規約的意味を定める有効な手続きを提出しておらず、そして彼の影響のもとで活動する理論家たちが、その欠点を引き継いでいるためだとする。この欠点を、コーパスを利用することで補うことができる。これが Bultinck が取ろうとする立場だ。つまり、コーパス上でもっとも頻度が高く、もっとも広い文脈で現れる内容を、言語要素の規約的意味として定めようというのだ。Bultinck の目指すのは、Grice 的な語用論の基礎理論としてのコーパスの利用なのだ。

だが、これはうまくいくのだろうか？ 数詞に関して見てみると、「絶対値」を数詞の規約的意味と決定し、それにもとづいてさまざまな数詞を含む発話の持つ内容を算出するというのは、一見するとそれほどおかしな発想ではない。ところが、実はこれは Bultinck が考えるほどうまくいかない、そう私は考える。およそ理論というものはいくらかの抽象化

を必要とする。それは Grice の影響下で成立している意味論や語用論のような分野についても言える。いや、それらは固有の言語を超えたかなり一般的な言語現象の解明を目指しているのだから、むしろ抽象化の程度はかなり高いとさえ言えそうだ。

Bultinck は言及していないが、もともと Grice の含みの理論は自然言語の抽象的な理論というものの可能性を保証するためのものだった。Grice(1967)では、自然言語の雑多さを嫌った Russell のような論者のみでなく、その雑多さに自然言語特有の価値を見出そうとした後期 Wittgenstein や Austin といった哲学者も等しく批判されている。Grice の立場は、自然言語の雑多な部分を捨象する手続き（取り消し可能性など）によって、自然言語の形式的探求が可能になり、しかもそうした形式的探求の成果といくつかの格率にもとづく語用論のプロセスを持ちいることで、そうした雑多さを体系的に保証することができる（改めて理論中に組み込むことができる）というものなのだ(Grice, 1975)。Bultinck のコーパス分析では、この最初の捨象がうまくいかないのではないかと。実際の多様な用例の頻度分析という手法では、どうしても具体的な状況下で生じる細かなニュアンスといったものが、その分析に入り込まざるを得ないのではないだろうか。

実のところ、Bultinck は「絶対値」が数詞の規約的意味であると主張しながら、ときにその論調は揺れている。*two* の「絶対値」用法が具体的にどのように現れるかを検討する中で、彼はその「絶対値」用法に含まれると考えられる事例においても、いくらか**ぴったり 2**というニュアンスが強いもの、弱いものといったさらなる区分が必要だと指摘しているのだ。そうして、**端的に 2**を一方の端に**ぴったり 2**をもう一方の端においた、連続体としての（数詞の）意味という考えを持ちだす。もっとも純粋な「絶対値」から始まり、**端的に 2**なのだがややモダリティを含むもの、「絶対値」にならない程度にはモダリティを含むが、その度合いがかなり低いもの……という具合に、連続的に数詞の取りうる解釈が並んでいると言うのだ。そしてときに彼はこの端にある「絶対値」が数詞の規約的意味だと主張する。もともと彼は一群の用法に共通する「絶対値」解釈を数詞の規約的意味としていたのだが、ここではその中でもっとも「絶対値」的傾向が強い解釈が規約的意味とされているのだ。だがこの端というのはコーパス分析によって発見しうるものなのだろうか？ 彼の議論に従うなら、これは他のいかなる言語要因にも影響されていない数詞が取る内容になるはずだ。しかし、彼自身がわずかに足を踏み入れたように、他の言語要素が持つ影響が極めてかすかなものさえまったく存在しない環境というものが、どこまで突き詰めても見出されないというのは、ありそうなことだ。

「絶対値」と「絶対値」の中でもっとも「絶対値」的なものとの間で揺れ動くとき、明らかに Bultinck は連続的に変化する数詞の意味を扱いかねている。こうしたものが、形式



的な探求に適するだろうか？ Bultinck が提出する数詞の規約的意味を、理論的に厳密に扱うことは可能なのだろうか？ 理論的に扱える程度に、それは抽象化されているのだろうか？ こうした問題に、Bultinck ははっきりとした答えを与えていない。

だがもちろん、これは Bultinck の方法論自体の失敗とは限らない。むしろ、それは彼自身の希望に反し、Grice のラインに沿った言語研究の、あるいは言語を研究するという構想自体の根本的な困難を明かすものかもしれない。

#### 4. 本書がもたらすインパクト

最初に述べたように、本書はコーパス分析という手法を、英語数詞の探求に適用することを試みている。そしてその過程で、膨大な生きたデータという強力な道具立てでもって、(neo-)Gricean と呼ばれる人々が主張してきた「少なくとも」意味論を、かなり説得的な仕方でも反駁している。だがこの方法論を突きつめた結果、Bultinck は理論的扱いがそもそも可能かどうか定かでない、極めて具体的な言語の一面に至った。

コーパスが実際に存在するテキストの集積である以上、われわれはそれを無視するわけにはいかない。そしてその経験的なデータの集合が、「少なくとも」意味論のようなある程度影響力を持った学説を覆しうる力を持ちうるということを、本書は明らかにしている。だが他方で、コーパスの利用に傾きすぎたなら、およそ理論化ができなくなりうるような言語のありように出くわす可能性があるということも、Bultinck 自身が身を持って明かしている。

本書がもたらす教訓は二つある。第一に、われわれの理論が机上の空論にならないためには、われわれはコーパス分析がもたらす帰結にきちんと向き合わなければならないということだ。第二に、言語の形式的な理論（あるいはおよそ言語の一般理論とよばれるもの）を推進するためには、コーパス分析がもたらす帰結からある程度目を背ける、あるいはせめてその帰結の精度をいくらか下げる必要があるということだ。ある種の方法論的決断とでも呼ぶべき抽象化が、言語の一般理論には不可欠なのだ。これまで何度となく指摘されてきたはずのこのダブル・バインドが、コーパスという強力な道具の出現によって、かつてなく差し迫っている。この新しい道具に対して言語の哲学がどう向き合い、それをどのように取り扱うか。このことを考えるべきときが来ているのではないだろうか。

#### 註

- (1) ここでの意味論的内容とは、文脈的な情報を持ちいることなく、言語要素がそれ自体で持つ情報のみから決定される内容のこと。語用論的内容は、文脈情報に依拠してはじめて発生する内容を指す。
- (2) 語や文（の発話）に与えられる内容、解釈を、ここでは**ゴシック体**を使って示す。

- (3) 取り消し可能性については、Grice(1975, 1978)を参照のこと。
- (4) 具体的には量の第一格率（必要なだけ情報を持った発話を行え）を用いて説明される(cf. Grice, 1975)。
- (5) British National Corpus の略。現在最大の英語コーパス。
- (6) 「端的に」に当たる言葉を Bultinck が実際に用いているわけではないが、彼の意図するところをわかりやすく示すにはこの表現が適当だろう。

#### 文献

- Chapman, S. (2005). *Paul Grice, Philosopher and Linguist*. Houndmills: Palgrave Macmillan.
- Grice, P. (1967). 'Prolegomena', in Grice (1989), pp. 3-21.
- (1975). 'Logic and Conversation', in Grice (1989), pp. 22-40.
- (1978). 'Further Notes on Logic and Conversation', in Grice (1989), pp. 41-57.
- (1989). *Studies in the Way of Words*. Cambridge: Harvard University Press.

〔京都大学大学院修士課程・哲学〕